

孫子兵法

大王家  
竹代而同

六

司馬文正公集

石大臣家詩合

九條殿下兼實  
治承三年十月十八日

元祐文庫

藏書

題

霞

花

子知

月

紅葉

曉

述懷

曉

曉

哥人

志

曉

左方

曉

女房

曉

皇太后宮大夫入道

季經鈔

行頬胡尼

師光

良達

俊惠

寂蓮

別當局

皇臺門院女房

右方

大武入道

源三位教故

經家翁尼

基浦翁尼

資隆翁尼

仲緑

資患

那昭

左因

丹後右府女房

判者

皇太子宮大夫入道釋呵

一齋霞

左孫

皇太子宮大夫入道

右

やまとたゞとまのゆうじとくふとせを黒ともあようつむれよニシテ

大武入道

たちまつまちあもまくねひきづりよもと志ヤクぬ乃浦  
左す山乃くあまくばうほめくもくらんこくもく事  
又くゆくとたすちうづく乃浦ハモカツツセモれ  
フセキムシ浦浦ハ松の木を波の氣色眺望うきり  
あきくあくそゆくあくそゆく伊勢物語より我門  
六十余里乃中みちやうの浦よ仰てあくらむ  
とそくとねぐる事あくそゆくあくらむことと  
もうりいもくい浦もやいもくやはくんなの事うろ  
くまよいあく孫と一齋乃左孫にうりて揚と定す

右大目

二

卷之二

九  
獨

女房

千歳  
西あそび去れどやうせひまくりとあまくらつもあらむ  
右  
原元位相政

卷

孫之位初改

三  
卷

九

裏まへてあひととひゆんこまもうせつされ  
黒のつるぎやまくわづん

寂蓮

तात्पुरा

仲  
經

うかふくあぬ沖乃もあれふかうじまのあせがれ  
たあれ山よもゆくはとうちますよひとちく  
所、かくとよもゆく洞傳よばくとくへとあらわし  
きくくとよもゆくあれふやくふゑふああわ  
ねくまじま泰山へわくをふのめぢれたらむよ  
なまくあれふよもゆくはとくとくまくまくわ  
てあふとくておとく

卷之三

三

た お

女房

三れ人のまもあやまめあれをこそゆへ室あそりされ  
あ

大武入を

まみくらへ吉野乃山のまくねんをひよありよみうか耶  
左手す旨飯殊事程けり但上るせのち御傍よ  
ちくやゆくじあく一望のやう乃里まくねんと  
ノリく御細毛も花ととりつやあさきむらの花  
んよあかすさんとばくはるのあくろいもくわがれ  
他事をくうんあまとくらまくへだす下もとふ  
とうあへよるあくへゆりあむ

五番

た お

陰作歌

せとまくはるとまくとまくよあふももだりうりすく一望のやほ

名固法師

た

まくらもとや風よゆくまくめとあらまくは情じくりよ  
左右あく首さりふか向かくくいねどれいみく一望  
乃山とせといふ佳象とまくらきまくとまくとまくも  
まくふとまくとまくのまくらきまくやとまくとまくとまく  
左右とまく風よゆくまくとまくとまくとまくとまくとまく  
れじんじんとまくはまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく  
あらうとまくとまくとまく化あま松よはくん共  
よ徳員不かぬ仍乃持

六番

た お

寂蓮

たうひまく花かぬ人やおあはんをかむ乃あくとまくまくとハ

右

頭照

あやまふるゆくをとらぬれどもあやまの白を  
たのこむよもととおき野乃山のふるあわせといへ  
ほんねようそくのいとむとあひてさんとんさーの  
あくこゆよ芳野山もかくとくとくとくいとは  
ふきりああきりゆくもととくとくぬまひとけよハア  
ハモリタリとやのくやとくじとくめうふくまとりすむ  
きでととくのやうをくくよやとくだらひきくやう  
よくよくああとくとくとくとくめうふくまとりすむ  
ぬよやたうゆくふくまとりうゆ

## 七番 郭公

たお

宝を后宮に入道

千載

笠原隆朝

やくさんとくあうやとくとくとくとくとくとくとく  
子供のうかやうかよ家とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一四にとくはめ具ハ依例不能勝負

## 八番

左移

行頬胡臣

やくさんとくあうやとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

右

秦浦翁

あひのう室あぬをむかへてせんとくわせん  
たすくはよもよもくちられきとへりつゝこひあひなせ  
婆とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まうみつやうそく又あらへせん事そりと見えむけ  
たて猪

九番 月

丸ね

陸佐翁

まくまくうそくの日影ひまつのりうらまきうりうり

丸

丹後

ひまくろあさのじよわあふまでも水よやく日う郎  
たんぬぬあひきういてゆう三と意乃やまの日うのや  
れきとそ同あわくもはせすたうどもあよやくふ  
まゐるてふよ経くくとくと中のふ文字のれ  
しやくふまくくすもゆせたはてうみう難あくち  
いまゆくくねくとく

裏書云法性寺殿内大庭乃時のす舎山月

旅乃まくまくのやうく月影ひまくまくのやうく

十番

丸ね

別當局

丸

道因法師

がまうあらそひん月をひくせん山の鶴をひくとくとくとく  
左姿立ちかおもむけてといづ月乃もくとくとくとく  
云うれてもあらそひくせんまくは優はゆくたより  
落月うやとくもゆくまくは東屋よびりあ山よくよく  
まく里うゆくれとだかがくとく事とくとく時  
自あくこよへゑもゆくは但す第ひとうくゆれも  
これも又ある

十一番

右大門

佐惠清

月乃も秋の風す  
あまよあづねれ  
ハヤシモトカタマリ  
ムツモトムツモト

卷之三

源三位和

卷之三

九  
九

佐惠清師

日と魚と山のあらわしの如き

七

沈氏集

卷之三

十三番

九  
九

卷之三

太  
參補氣

十  
卷

九

卷之三

卷之二

大藏入道

物事もあらざりとく候とまふ事も無乃と  
左ひとくよ林をめぐ事とわざて往來するを嘗て  
うるやむじたるにまつてけどもとがふ  
うといふ假石寺傍り家は五十里乃締障子にてたゞを  
じよと風ひやかと遊ばれりとゆす但上不思量  
をみてあよこよとひつた同事りやゆびきよハ約  
乃松よハねれどもうよひとくとくよしもれと若  
切韻とくゆすよ游離也以柴壅也とあつて松よれ  
やくゆす仍勝負不外の寂下愚老已迷是那西方之  
明士定次雌雄矣

十五番 雪

左 お

宝光院まち入道

續本

右

名因法師

物戸あきてやれ雪どもあやん心のゆかあくつひ  
た高んハ山居乃きとて彼王子獻う山陰乃雪も  
戴安道とおもふすとひづるやといふとむれとあれお  
もくよきのすもくもくゆじむれとひづれこと  
えんそもくもくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
もくもくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
あいもさむのぬよゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

十六番

左 お

おもよきとてまみねひむこのもくとくやくのまくゆの

毘盧法師

派りくひどくアラハ乃モ西ひミヒルモアラハモツトモアラハモツリ  
たゞす施宿の事モヨクモアリモハレトモ乃照ルトソリ  
文字はアラハノアラハノアラハノアラハノアラハノアラハノアラハ  
アラハノアラハノアラハノアラハノアラハノアラハノアラハノアラハ  
モアラハノアラハノアラハノアラハノアラハノアラハノアラハノアラハ  
又ピ山ひ立ムヨリソシハレハレハレハレハレハレハレハレハレハ  
アリテモヤハレハレモヤハレハレモヤハレハレモヤハレハレモ  
イアキアヤハレモヤハレモヤハレモヤハレモヤハレモヤハ  
モヤキアリトノアリウムモジロキモアリトノアリウム  
乃モヨリヒミタニシモヨモモモモモモモモモモモモモ  
ラムアヨツモシムンダモアモレモモモモモモモモモモ  
と月と夕シヤモのモリモモモモモモモモモモモモ  
モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

仰了雲乃曙ひち絶れ／＼くもややんをば／＼じとくせた  
あま

## 十七番

寂蓮

新古今

大経

大戒入道

さりそひくふ人のまふれ／＼乃室の事のゆふく經  
右  
院人ハ云ふまうとやめよんたまやまのむれあきの  
くやまのまよんたまやまのまよんたまやまのまよん  
くやまのまよんたまやまのまよんたまやまのまよん  
やまのまよんたまやまのまよんたまやまのまよん  
やまのまよんたまやまのまよんたまやまのまよん  
まよんたまやまのまよんたまやまのまよんたまやま  
う魚よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
文たのよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

十八番 祝

丸 オ

別當局

五代の事とちかくみとひまつてあらう神りゆくに思  
大式入を

わらうみたれハ何と人より五代と云ひてうそをあ  
たすいもひのひよくはりあへるどりあへりとひふ  
とおれあるものと云ひておこすといふにハきよ  
とひよもくまくまくやねんをさむもむよ  
く祭の心となめふとおとすはまく

十九番

丸

事経筋

二十番

丸

源三位相政

五代の事とちかくみとひまつてあらう神りゆくに思  
大式入を  
五代をつにまじせやかねうまくとひまつてあらう神りゆくに思  
大式入を

二十番 忽

ナ

丸 オ

室太后宮大支入道

ナ

丸 オ

丹後

五代の事とちかくみとひまつてあらう神りゆくに思  
大式入を

をもあらひとせめをそまへとつまうちとせば  
くもえのすとおわててこそ但彌圓不能宣す

## 二十一番

左 繩

季子経物

<sup>千載</sup>國の出でるるもまきあ風風をもてほのつまきりせも

右

顯照法師

うもみのんはくしとひりあとうまかはるよあくねよぢ  
たの事あらむれもまくすとひりてまくも傷よ  
ゆめりお婆ハ村一をねはけとまくのゑひゑよとく  
あがくまく三くもくうやとまくわらんばたる爲

## 二十二番

左 繩

後醍醐法師

<sup>新喜</sup>まくまくハまくらとタマクル秋のまくつれてゆ

同

空國法師

くれみみかみくらみのうりゆくといふがまきてとまよ回る  
左祐乃タマクルの事風きといもん歌の事よ  
そくあれこれもい入る事よハ傳くー右紅  
うもく乃色のうもくまくつての事よくこう紅  
といふがまきてとまよどりやとづふま乃もも  
くく傳くめり但左毛れあくうもそえばれハ左祐

## 二十三番

左 繩

女房

<sup>千載</sup>

右

經象法師

ゆきゆくゆく人のまくらゆきゆくゆきゆく  
まくらゆきゆくゆきゆくゆきゆくゆきゆく  
左毛りむひつてるゆくゆくとまくくゆくとまくゆく

いよめくひてあむをあひるぬだるす  
あふもとれへくうゆくやれをうきとまくの  
やといつ教めくとせゆるもとめりやあそりさ  
あゆもあくまくじくわくくゆくん仍以たゆ猪

二十四番 旅

左 猪

隆信翁

猪のもくじ猪乃うと圓のうわ猪勝をうめりあきぬみよ

左

源三佐

まちへいきとくをやるをふう乃山へよきとくをあ紀  
たも猪乃うと圓の勝たのまくをちくとすよゆーと  
とくとふうりてゆりぬきは猪乃くゆめりまの  
も乃ゆぬうのあらとくとくをげば幸ふやふやまくら  
てさまでとある事乃例の事とあがく

右字はの山魚とひよとふうと人とあけきとと  
攸うつめやまく乃うとけうじうとあくとひく  
くううあくとれあくとあくとひくとひくと耳と  
まくふあらとたへとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

二十九番

左

喜多院翁

一載

左 猪

喜多院

あくに面新まくね都うかうろやうはうらまくまく  
猪のまく度とまくしとくとくとくとくとくとくと  
左右とくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
あくまくと神のあられとくとくとくとくとくとく

猪のまく

二十六

左

信函法師

蒙古文題簽

右  
續

那照法師

二十七番

左  
續

女房

日と魚の如き乃

仲  
緒

多珠聖みあわせ まくらとおもひ小菴アラシをあつめ  
たるもんかんおくくううけられ浦マツシマにてとづき  
のいふくまやうめじたすこゑのすけは  
たまうり、みあとくまくまくま  
くばくはれそ可

二十八番 追憶

九

皇太子宮大史入院

かくはくあくおもむきうみ  
ちるまつとてみゆうそぢる

七

もあれぬゆくもゆくもおとづるぬあらそぞれやまんじゆれ  
たとうかく、まよまよきじじき事へるもやく  
竹れおみのあらわしむれぬめう  
わふ懸隔之上判者愚詠依例不能勝負

二十九番

千載  
大  
勝

師光

いざりひきぬあよかとあくまわぬ後のせんじんせん

九

卷之三

うきあはれおもろみあらわすよまんせんめい  
たのむかわくまくわくおくくくとくゆ  
あねちのれとくみとくまきあはるとくゆ  
ひきゆくわくとくやうのまなんづくよみあれ  
あくわくよやくはむだまくとくゆ  
あくわくよやくはむだまくとくゆ

三十番

大持

女房

おまえでもういつかのうき乃ねよどかくや略乃ちひき

卷之三

まみ浦よもとたちう

右府

卷之五

おの猿ひらとうほくさか浦の舟ふる岸もだれぞれアミ

左方

女房

猿三 オニ二

季経物

員二 猿一

リホ朝臣

猿一

寂蓮

オニ一

寂蓮

オニ一 猿二

別當房

オニ二

大武入道

オニ三 員二

經家物

員一

波音朝臣

オニ三

波忠

猿一 員一

名周

オニ三 員一

判者

白毛左后宮大支入道釋阿

右方

大武入道

オニ三 員二

經家物

員一

波音朝臣

オニ三

波忠

猿一 員一

名周

オニ三 員一

丹後右府女房

オニ二

時代不同哥合

左

柳本人麿  
山多赤人

中納言家持  
參議宣

中納言行平

僧正遍昭

小野小町

在原葉平朝臣

後京極揆政

右

大納言經信  
法性寺圓白

中納言國信  
西行法師

皇太、后宮大夫俊成

前大僧正慈圓

正三位家隆

藤原敏行胡臣

丹後

伊勢

元良親王

中納言定家

修羅太夫顯季

吉原元方

中院右大臣

延喜

平貞文

中納言兼輔

良運法師

紀友則

左京大夫顯輔

記貫之

紫式部

源俊軒胡臣

一宮紀伊

泰謙雅經

俊惠法師

苏原範永躬臣

能國法師

崇德院

相模

式子内親王

藤原深喜父

蟬磨

清慎公

麻宮女御

右近

中務

源信明

謙德公

平益盛

源順

道繼以母

大中臣純宣

清原元祐

源重之

小式部内侍

花園方大臣

刑部卿範兼

白河院

藤原秀純

寂然法師

祝部成仲

藤原隆佐

寂蓮法師

讚政

後醍醐寺方大臣

藤原基俊

中納言延房

左近中將公衡

從三位有家

待賢門院堀河

大僧正行昌

從三位有家

後鳥羽院

馬内侍

赤染湯門  
和泉式部

殷窟門院大瀬  
宮内へ

左

詩歌

四

山赤人

龍國川りみらまかわれ神さひ乃まじうれ山よ阿彌淨じ  
右  
タまわる門國のじまくととつきて芦のまろ原よ松風を吹  
左  
あひまのまきか尾のまくわれまくし森とひまくわれん  
右  
君う代まつまーとそ興ふ神風やまくはそ川のまくんびら  
左  
きよめすう神まくやうのまくまくはくまくせまく風ひまくてま  
左  
がまく風まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

柿本人麿

大絶言姪信

あどくかのうはまんとよしやまよはるよきを言ひ得つ

右 法性も開白

そなまやくふにみのうひて左と部に目ひりひじ

左

むしれおやまや人ひよあまや様うしてくすます

右

思ひゆきあみきとあじきひあ、のよめぬまを

右

わぬ湯よみやみちく水かとあこぎとみて風露鳴浴

右

和風の原こまもてやまかくのきわふゆふがまつらう波

右 仲納主家持

まことの様原じまく風くねを小ねく原よあるをさば

右

中納主玉作

喜自歌ひよみかえよまよよよよよよよよよよよの漢音

右

かこひのみじみの山のくとうううう歌くとれいよみよ

右

何事とまつともあふゆく坐ててくよ成ようう家

右

かことのまくせう様よとくあのとうととれいよとく

右

山歌うてまくせう歌くとくのあくねうに

右

和風の原やまく風うきてあく出ねと人ふと音よ満生れ翁

右

あり法師

降りまゝきの乃にまかうけふくら清瀧川のあたまを派

大  
おひまやひまわくわよがくうて満生のあたまにしきつらと、

太  
あまくめやとやほのまやほぬくんいこまの嶽よまくわく

大  
があまくはくらゆやハササカハクマカニマトモス

大  
あまくと自やハあと思ひにかくらふやあまかくらうね

太  
うちがいもん乃山のまよがくうまくとくまく今くらさん

太  
室太后宮大夫俊成

まくねほのつゝうけよくり苔の袖つるまきやうれし

大

まくねほのふ人あくまと奥浦よりやなまうきかと答ふ

太

立つてアシシテアシヒ松葉をアマの笠を派よあくま

大

まくねほのまよをとすれ思ひ入のあくまと庵をやくま

太

いのまんあうれの様もうくん阿とよかん今くま

太

大傳と是國  
深れとじくねたりとて阿庵までれをつと御年月ノ那

太

らんき花乃夜ようりふくう吉の秋ようよたりせよ

太

あやまかくうきせの民ふぢり威ふうれよま深の神

太

まのめりとみやせ事のをこれにあたりあらん

太

みうくまもくやまうよをもひて桃やせきづけの野

太

花乃色はうつりふくうじふきよめうせようもるわせよ

太

正三位家隆

下紅葉うちゆきの夕阿ぬにてやひとりあれらく後

太

きかみてうつふあはせのふれ人のふねにそありも

右

松乃アヒキアキアヒルムヤモカラムノ月トカクア  
太

右

酒士のとし酒くよの内機をたまセとテモうれをめ

右

あめの内機をむきたものあううるをめ思ひありく  
太

吉原業平朝に

太

花ふあぬうけまきいつをせうたうのこよしよにう向ひ

ほ京極持政

太

鳥乃とあるの小暮咲りうれく夜の月とうふ  
太

太

きくはよそあつまひとてはぬまき下にあらうと

太

宿みだゆきをもか夜もとのよだりとてたゞ

太

いよみのとちやれてまよひ川袖よむちるとれがりとん

太

萩原敏行胡に

私をねどめうそをうそとねとものきかとちとあうまわ

太

丹後

三月ふ難波の私乃西のみをもとうかとし月はやく

太

あき秋のをもとよんりとめれおの内もとさくまやせん

太

おやじふ都にとすぬれもとくふくりとくあく

太

ぬくとゆるよがまとてあらまよつとようとからう

太

きふくやくばくらきとあやれう苦のたれくふかくね風

太

伊勢

あひよひてあがゆびのうう袖とよく風とおとかやう

太

萩原清浦胡に

だづれうのふれとくわくとくわくとくわくとくわく

太

三箇のいふまぢひまぢもひぬかく人をあへと風へ

太

いまうちまむまで月はやくものとくとく洞あらむ

太

思ひ川あそにあらあゆの泡乃うきこへよあつてまくわ

太

それのもくじまのあのうよあらう月の朝乃よまき

太

えうれ秋玉

ものあきしーかくふやく人のんまきとうづうひよまき

太

中納之宣家

さくらぬう山きのうのとよあよ雲とまくゆふ底の月を

太

あすかはまのうのうとよあよ雲とまくゆふ底の月を

太

きく山河あらうのあまらくめうとよいまのねま

太

さくらぬう山河あらうのあまらくめうとよいまのねま

太

まも壁ぬうほうすのねりきよおとまくの杜が下を

太

まみ性

あめまやあつれと風うんまくともあくタウモアヤマヒトヒ

太

修羅大文字

大井川ぬきまのうのうとよあよ雲とまくゆふ底の月を

太

おゆあらうまくゆふ底のうとよあよ雲とまくゆふ底

太

まくゆふ底のうとよあよ雲とまくゆふ底のうとよあよ雲

太

今うんとひとうとよあよ雲とまくゆふ底のうとよあよ雲

太

うれくはほのひとと神とまといへるあらゆることを思ふ

太

立原え方

あひにまよひをもれと喰あらひせらむのまことさう

太

仲院志大臣

るのまことたまう様乃あこゑよ花のまこと乃温ね身となれ

太

きりぬくはすあまとおまのこよしとまとつうかみ

太

ありと川あま一派きりうらの都とややや昔れ新そよぎね

太

まくわの空と風かよき人よひとがまつまく派

太

あまくへいはくまくはなだら清きる派のまわふはとのまこと

左

延喜

あひき山す観くまてやあやめれまの神またて

太

後法性ち開白

けまきとああまちまぢうてひくらふ風のまうみ

太

じくまむかまくあく孫とも深くそんと思ひそめつ

太

あくまくしゆくらかおまかまくまのまを清まくらぐる

太

あくまくしゆくらかおまかまくまのまを清まくらぐる

太

平貞文

れりとまくと涙せんと氣

右

大歎言家

とまう勢ひ花のまつとあはせあふゆうの匂

右

むりやまのの悲きしふぞりあらわす

右

かことてやまへあおひまよかの匂ひをもん

右

ありとね令下宿よがとうらうとすゑく歌にしれ

右

たの世とあまく涙といひあらわりやせまへ正深内袖

左

中納言並補

そうあめりよかののまのね風よくいこよ

右

中納言俊忠

まてまくよらかせまてまかせまかわるば  
左

あまくよあら下宿よねまくわらままで今もうらに

右

あまくよあらのまくわらくわらまく涙の下ま

右

じえあらくわらのまくわらいのあらよせよかの涙の物

左

紀友則

まねき雲わらふりわらうまくわらう人のうき

右

吉邇法師

尼の法事も御身もおもてねのまへえとおもひ

太

車輪のまのやうのまへんと圓ひるさん

左

さゆりらふをとおてむじきはしきむおもひの夕景

太

下にのまへくまの旅りあきてスルアキラキ

太

いづれとて緑あまへぬとけぬほくとしやに津う月

太

あくびよけぬよひかみぶつまめぬよひふくら

太

左京大史歌

太

がくよあたぬるの鶴鳴きぬよそにゆくやまのん

太

じよよて乃下にまく山の井りあそとくよがれなば

太

あゆとくやのいはあれどもそよむにまく金うちる

太

喜多川の源たゞゆく水のよやまくと圓ひるさん

太

おひくよしてのよみとれてぢやえてうんぎのほま

太

凡河内躬恒

紫式部

みづ節のまのくとくあわじひとかみるきだすま

太

住す乃松と松風吹ふを打すあまうとくも

太

写すの風の音とあるがおのづやうのうん

太

いさあよやくあらぬ夜あらむとありぬゑう歌

太

アノ人の煙とやらタバコとひづきた塙の満

太

まうとひづきややく山とあてとあはやん

太

山萬葉をうるそひのやかみゆうのと

太

萬葉とおもむに物のなまくの曉のとよと

太

うづけぐ合まつたのとあよせうれどいあらぬりと

太

まじめほきみくみくあれより曉計うまめハヤ

太

風の音をあてひよの音あひだまくとひよあひだまく

太

あきらめをあひゆすれどあもひてやとう人の音

太

そく露もあひゆすれど秋風よすれくらうまれば秋の

太

かまうよすれくらうよ遙かきのくゑしておねまよせり

太  
浦ゆよ吹くのと風乃瀧ちくら涙ちくら一垂まじあくせ  
た  
あ疏乃みよきけりまつのも風ひきるとまつ金ちた  
太  
そよてまつたの瀧乃あ疏へもくや神のねきとすれ  
た  
大江千里  
月アキハラふりのアソウクレホオヒツの村アムネと  
太  
秋アキハラ自アムニシムアムクわれアムツオアツモムン  
た  
紅葉アムと風よ風せでアレトロムタカヒガ命アリル  
ハ

花アムヒタマアムアムトテ花アムヒタマアムアム  
太  
とめのあアムヒタマアムヒタマアムヒタマアムヒタマ  
太  
うみアキハラのミツヨウツ烟アムヒタマアムヒタマ  
太  
坂上是則  
ミツヨウ山のミツヨウツ吉ツヒタマアムヒタマアムヒタマ  
太  
後藤は師  
まアムヒタマアムヒタマアムヒタマアムヒタマ  
太  
あミヤヒタマアムヒタマアムヒタマアムヒタマ  
太  
ウマエミツヨウの浦アキハラの浦アキハラの浦アキハラの浦

時代不后

十四

九

太  
多  
の  
事  
は  
元  
の  
事  
と  
か  
ら  
ま  
ま  
よ  
く  
あ  
る

九

清原深養父

カニハトモリハシタヒテ  
カニハトモリハシタヒテ

卷之三

アラムの勢は日本を攻め  
アラムの勢は日本を攻め

蒙古文書

३८

大  
禪磨

九太

タニシ正義の御子孫也

太

九

セウトハタマテシカツトモアサヒ

月  
六  
丁

大  
都  
之  
事  
記  
卷  
之  
一

九  
清懷公

とて、  
まことに  
生む所院

右  
卷之三

九  
金言の事ひと御みゆきの事

七

湖と見るにあらへて湖川のそれてもあよありんと見ゆ

卷之三

右

卷之二

八

八九

卷之二

ア  
ちの酒たちひろの酒よひろよ今もあててまうあくまく

三

五  
七

三

卷之二

大

裔宮女御

袖下まへおのタヒシテれりまへあらうる處とがまつ  
太 式子内装玉

あめまひぬおちかの布とれせまつて日やまし  
太

あれりもうみ世をれや法テの酒三乃造瓶衣とがまつ  
太

あめまひぬおちかの布とれせまつて日やまし  
太

れうきふ祝のうへてはくわて圓ひあましやまをもあま  
太

いまでよあとよて人をつめ  
太

太

袖下まへおれをたまむとふね思ひうしゆけりまへ

太 小式詰肉付

思ひ出でキムラさん人のゆきうまふたてう金さくに  
太

とすとまつよ月日ハあむせりそよせてやとへうぐく年  
太

あめまひぬおちかの布とれせまつて日やまし  
太

えめあめおとへ金の金れ行くもあら  
太

大ぬいふおちかの布とれせまつて日やまし  
太

中勢

おののゆよつまともとつあぶ森の葉あへるけまへ

## 巻之六

十一

太

巻之六

ちくねらふもとどよかくもあへてまかわほのちくふもう節  
た

ヨリキふうやく一めどありてそいはくふくすうくと成ん  
太

まへ行くへこひだのじきに風ひ立つてすみの音  
た

うきのうきでぬねはうきうきやまつてうきの泡

あきのしきやまくらのとくとくの音

源氏物語

太

あくまむ月と星とをくいあづれをまんくよせりや  
刑部に詫意

太

あく代よあくは誰もうけと花ひうすよゆくうか節  
た

あくとまゐる月の月新よなまゆおほにやまくらうの月

太

月うと人よひてあくしれとあくまくたゆくゆくゆく

太

きの秋のまゐる新えの花よハ洞くらぬあくまくあく

太

あく秋ゆく人よ人よ人よ人よ人よ人よ人よ人よ人よ人よ

太

謡曲

白河院

庭のあく月りくゆまとありようぢよまよあくわきあく

九

かのうらうくむとひまつてまつまわいにこのまひと風ひとすん

太

あやめ川よよ流れをゆるもて風のやまのほまもとすん

太

かのうらうもあらはたひあやめとへよよまわいのま

太

ひよきれをとおまへまよも雲の流れに神そめりも

太

平蕪盛

きよてゆく林のふるはまくわがありもひひあらそくさう

太

森原美能

おにうて風すくすく萬まきぬまやまふ風とりくまんてん

太

たうりあくひいそ教へはまやんくまく川の雲ひまくねと

太

くはのいろとそぞねまきのまとのねよれはまくさう

太

思ふれどきふせふくわめめのまとのねよれはまくさう

太

源順

まふみそののむらみだらぐりてこそゆあやまくまのむ

太

寂然法師

太

れふみゆくしらうりふるゆくや森わくはのまくわくはく

太

みゆくみゆく風のとがまされことひそれのまくはく

目錄

十九

六

まことに今もあつてゐるのよ乃おもそか  
た

名と云ひて  
あれと何處か  
八色の色

卷之二

九

卷之三

太風よつきてしむら全かほの御ひをいはす

卷之三

は  
ま  
く  
て  
と  
ふ  
思  
ひ  
あ  
や  
わ  
ま  
く  
と  
も  
宿  
の  
つ  
ま  
と  
ア  
ラ  
ウ  
ル  
ル

たばこをすく  
煙草の葉がとくと  
火のそばにふかまると見えた

卷之三

あはのまよへまきわらふのまにまを

左

氣をもねからぬはくもひかふらんをやうよ

右

の書ふもととのこそあらまことゑの宿よ被ねり

左

むちりもくへて袖とあらうまのね山浪

太

藤原隆行

うきのとうわれのまことにけや康のまおうじ郎のまゆ

左

大さばかきみかみせくふくのまく

太

波くともあらねふの想をまつての叶といづるま人

太

うといひてせとひゆくかうじのあらうねがや成え

太

我れのあらうとあらうとあらうと袖のうぐれ

源氏物語

太

ましのふじのまをよくなじれあらきよめのまをあら

寂蓮法師

まてゆくまの添いよしゆよあよあつまう波の葉す

太

おもひまと袖よ量とほみてよしゆやあとよしゆ

太

波くともあらねふの想をまつての叶といづるま人

大

大内也

卷之三

此卷之序文  
太  
清故

大

大  
蒙古國書

b  
b

あすれどもやくねめの道のうきはれ源よのゆゑにハ神々おれらう

九

卷之三

2

ひよそくとくらやまの花の種あふぐ  
た  
花山院

九

は坐ぢもたた食

九

た  
えのまわりの煙とのがたあいはく  
火煙をかく

4

うふの月にあらましと  
思ひもわからぬ

10

あさがきをなするあゆの流りよしの神とさんせん

六

惠慶法師

モナフ

太  
家宿乃うよふあてうなうのゑれをまことに流じえいまがり

太

蒜原基俊

えれよの月能がよみてとまひよ笑をとう泣あいじゆりつ

太

やく薄あはき宿乃もひまかくとくをやくねむれまほり

太

たまとの聖母のとお原あらわにやあらわすよまほり

太

て原あらわにやあらわんあらわゆるよ月

太

あのすまひすま袖とよそあやしていひもとねあまめ

太

身みぬ好忠

かまくらこくまくろーのあくしとまはよつまてあふひも

太

中納言匡房

ちかのゑ乃様うじよまうとやうのあたまもあくは

太

祚うい乃三じろうとくまれ下まうけてきうめんじ

太

けの空くまくまくらうあくわくまち

太

入日たまのとくへりとく原くまくまくとまゑあらう

太

ゆもしのせの度数うとくとくあくわくまち

太

源を海

ゆかくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

右

左を中將公衡

おぐりや野の草もおもとて泣のうせの日をやふ  
太

思ひよがれ 曲をまくとまきがあらうるよお風を呼  
太

まほよひとうはるあらうらうとも今ふあれどやひ  
太

おと控てよまく測りいづみへ鹿のぬれさす前まく  
右

思ひのりあががよきゆくもひみくうせんをなま  
太

藤原モ能

ひぐりのあくタの音をうひうらうつもくせぬ思ひよがれ  
太

従三位正家

あこ日新すや山の様をほまく泣ね苦うとぞやう

右

太

にれすかみみめう夜のやねくじくとくまく  
太

右

ひくらあまうとくめう夜のやねくじくとくまく  
太

右

あくらん物うかりの下すくまくらうじせひり  
太

右

蔓がよろまくとくぬ黒竹のよしのみ室乃君よしきとぞ  
太

藤原實方朔

太

事をめううとくまくせのよ盛とり三重そもおでうかか  
太

行慶門院塔河

吉原まくのをとおゆう吉原まくまくまくまく

大

太

あら様のまよへる風浪うねはよしむに人よがくわんと  
太

いそへ風ひきよしむのやまのよがくわんと

太

うよどみかへこがむひやあらよへたとよもめく

太

おとづまよしむ月夜の袖をめぐらすとよもめく

太

大傍画行る

まくわと袖のあらうけよまわうとくつ月もやまうとよ

太

のまわあれとくふねをむくあら夜とてあらわいなまく成り

太

とくとくのむれと風へじくもくもくからかふらんまき

太

のむれをまうねくひめうれうれうれうれうれうれ

太

まの産とてぬくと風ひくふくぬ黒庵の袖わんと

太

中勢の具平歌主

余あらすよあらすよとあらすよとあらすよとあらすよ

太

後鳥羽院

さくらひくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

太

タまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

お  
いとそりある事乃をのうさんへとほめやむかし

お  
せうれをねりてくらまなれの月といひあわあらん

お  
まとたまくまつる袖とくよせぬすらうきのまのけり

お  
ても内侍

お  
詠めく詠めらんまのまのせうまの間ま

お  
中納主師

お  
たうづやうづやうづのひとめあくは

お  
じうれをあくよおうとみゆみやくやく金きにの

お

よもぐふくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

お

あすのまきやかまとのまひのんまのれもあれよろ

お

追風よやくのまやくとうよめおもふくしをまく

お

かみく月みの月のまくとくまくねんやくまく

お

だいとくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

お

ほのまくとくまくまくまくまくまくまくまくまく

お

いとそりやくそりのまくとくまくまくまくまくまく

大

うほろつておもへ信太のせとよくひのそぞうちのう風

大

清めごまのうおれをまほいじのぬまのきのまほらん

大

和泉式部

くさり冥きなうと入ぬとけくに照せゆる元宵

大

元宵に

きうお竹のまくらく風にてひのきとまくらあま風

大

まほぢりたきの下にさわきてやかねうどやうそうの

大

香とまづまづたひ薫のひのまふと風とまづひ山の舟

大

すの匂は深のりうもあおとあくふ出づまことやう

大

ゆうゆうのくまやれはくちあくねむよあくよくせ

